

## 1 興味を引き出す工夫・情報の充実

- ・利用者が興味を持ちそうな資料を目につきやすい場所に配架するなど、レイアウトを工夫するとよい
- ・利用者が資料を自ら選択できるよう面出しし、定期的に並べ替えるとよい
- ・小中学生や高校生が本のレイアウトを体験できれば、図書館は情報の宝庫という実感も沸き、調べる力を養うことにつながる
- ・練馬区立男女共同参画センターには専門資料が多くある。連携することで、専門情報の充実を図れるのでは
- ・練馬区は専門分野を扱う図書館ではなく、地域情報、子育て情報等が受け取れる身近な図書館であるとよい
- ・医療、子育て等の地域情報は各図書館で発信し、専門的な資料は各館で分担して収集してもよい
- ・館の中だけでなく、移動図書館等、館の外に向かっての能動的な働きかけも必要では
- ・子育てひろば、学校、保育園等も活用し、区内全ての家庭に情報を行き渡らせ、継続的な教育的支援が必要
- ・ICタグ等デジタルを活用し、目的とする情報だけでなく、その先につながる様々な情報に出会えるようにしたい

- ・データベースが使えるというのは図書館の魅力の一つ。活用の仕方を発信し有用性を知ってもらうとよい
- ・生活に密着したものから美術、俳句まで、多様な講座から本に繋がるとよいので、事業のジャンルは限定しないでよいのでは
- ・現在の利用者に対しても、図書館がどのような資料を所蔵し、データベースを活用することでどのようなことが調べられるかを区役所のデジタルサイネージ等で流すとよいのでは
- ・図書館自体を専門的にしていくのではなく、他の専門的な施設との連携を強化し、練馬区全体での情報提供という発想のもと、サービス内容を見直していくこともできる
- ・中高生の活用促進は図書館単体で捉えるのではなく、学校と連携し、区の図書館の利用を働きかけてもらうなどの取組も必要ではないか
- ・図書館に行かないと、イベントや講座があることを知れない状況を改善し、PRしていく必要がある
- ・図書館の場を他部署に貸し、実施された講座を録画し、バックナンバーとして保存、貸出を行うことで図書館の存在意義を高められる

## 2 誰もがいつでも利用できる

・働いている層は、図書館に関心があっても忙しくて利用できない人も多い。電子書籍は、働いている層の利用の可能性を広げるチャンス

・学校図書館でも電子書籍の導入の検討が必要

・本を全て電子書籍にした場合のメリット、デメリット等、未来の図書館をイメージした意見交換もよい

・コロナ禍において、ICタグは非接触で貸し借りができるようになり便利

・読書バリアフリー法等に則した、ハード、ソフト共に全ての人に向けたサービスが必要

・練馬区立男女共同参画センターで借りた本が図書館で返却可能になるとよい

・館の中だけでなく、移動図書館等、館の外に向かっての能動的な働きかけも必要では（再掲）

・受取窓口として学校図書館を活用する案もあるが、学校図書館としての機能を最優先に考えて、その上で区立図書館としてどう活用するか検討したほうがよいのでは

・衣類品のリサイクルを行う施設の活用や地元の商店とのコラボなど既存サービスや公共施設以外にも活用して、宅配・返却サービスを拡充できないか

・買い物弱者を対象とした移動スーパーとあわせて本を貸し出せば、図書館空白地帯への対応となるのでは

・区民館やまちかどケアカフェに受取窓口があると高齢者にも便利

・返却ボックスと自動予約貸出機があれば、利便性がより高まり、利用者増につながる

### 3 図書館の特色を磨く

・医療、子育て等の地域情報は各図書館で発信し、専門的な資料は各館で分担して収集してもよい（再掲）

・生活課題に関する本は全館で取り扱うなど、基本的なサービスを保った上で特色を出すことで、これまで利用のなかった人たちの利用に繋がる可能性はある

・今ある館の特色が知られていないことが課題。区の情報誌などの活用やホームページでの発信をした方がよい

・図書館自体を専門的にしていくのではなく、他の専門的な施設との連携を強化し、練馬区全体での情報提供という発想のもと、サービス内容を見直していくこともできる

・図書館に名前を付け、その館の特徴が名前からわかるようにするなどしたらどうか

・住民の意見を反映できる仕組みがあったらよいのでは

・図書館のフリーペーパーやウェブマガジンを作成し、館の特色に関連した著名人を取材したり、企画を組むなどして発信したらどうか

・練馬区全般に関する情報はふるさと文化館で取り扱っているが、地域図書館のような生活圏の中でも、その地域のことわかる資料や事業があり、それらを通じた活動がまちづくりに繋がるようになるとよい

## 4 図書館を身近に感じてもらう

- ・小中学生や高校生が本のレイアウトを体験できれば、図書館は情報の宝庫という実感も沸き、調べる力を養うことにつながる(再掲)
- ・図書館の運営に市民が参画し、それが継続的に行われていくような管理・運営の仕組みができればよい
- ・図書館のお知らせは、図書館に行かないとわからないものが多い。区報を活用するなど、広報やPR方法を工夫し、講座等の情報をお知らせするとよい
- ・図書館13館でスタンプラリーを行うなどすると各館を知ってもらうきっかけ作りができるのでは
- ・図書館のフリーペーパーやウェブマガジンを作成し、館の特色に関連した著名人を取材したり、企画を組むなどして発信したらどうか(再掲)
- ・レファレンス事例を公開し、図書館がこういった場所でこういった目的で利用できるのか周知するとよい
- ・大学生を巻き込み、フリーペーパーやウェブマガジンを作れば、学生の表現の場となり、図書館のPRにも繋がる
- ・図書館に名前を付け、その館の特徴が名前からわかるようにするなどしたらどうか(再掲)

- ・今まで利用してこなかった層にもアプローチできるという意味では電子図書館は効果的
- ・練馬区に関する情報や資料はふるさと文化館だけで取り扱っているが、地域図書館のような生活圏の中で、その地域のことがわかる資料や事業があり、その活動がまちづくりに繋がるようになるとよい(再掲)
- ・他の地域の図書館と繋がりを持ち、まちづくりの中で直面した同様の課題に関する情報を得られるなど、地域性を持ちながら、垣根を越えていく「グローバル」な拠点となるとよいのではないか
- ・布の絵本を寄付してもらっただけでなく、ボランティアの方から作り方を教わる講座を行うことで、利用者に興味を持ってもらうことができるのではないか
- ・図書館スタッフは本の楽しさを伝える担い手。様々な読書体験を発信し、共有し、ゆくゆくは利用者一人一人が発信者になるような場所になるとよい
- ・中高生に向けては、SNSを活用し、写真を通して、PRすることが効果的

## 5 居心地のよい空間を作る

・板橋区中央図書館のように、スペースごとの用途を工夫しすみ分けられるとよい

・メリハリをつけて、話してもいい場所、そうでない場所を区分けしたらよい。どちらか一方の用途に偏っているのはよくない

・地域の図書館でも、近年の大学図書館のように静と動、目的に応じた空間を整備していくことも考えられる

・時間や曜日によって、場所の利用用途を変えたり、話してもいい時間としたりすることはできるのではないか

・音の問題は必ずしも話し声に限らない。ビジネスマンや親子連れの来る時間帯を踏まえ、部分的に音を出してもよい時間などを設定し、変えていくのはどうか

・図書館を利用する上で現状でどんな不便があるのかを分析することでよりよい空間ができるのではないかと

・居心地の良いソファを置き、そこでくつろいで本を読めるようなスペースがあるとよい

・トイレが暗く、子どもからすると怖いのではないかと。施設面として明るくするとよい